
魔法少女リリカルなのはA's 蒼銀の騎士

蒼空人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはA・S 蒼銀の騎士

【Nコード】

N8028N

【作者名】

蒼空人

【あらすじ】

闇と蒼銀が出会う時…時を越えた戦いが幕を開ける……………魔法少女リリカルなのはの二次創作です、その類いが苦手な人は見ない方が良いですよ。更新のペースは気分次第ですのでお許し下さい。

設定

古代ベルカにおいて闇の書と双壁を成した魔導書があった：その名は蒼銀の書、闇の書とは違い他の魔導師の魔力の蒐集を必要としなく蒼銀の書自体に幾多の魔法が記録されている。これを受け継ぎ时空管理局で数少ない古代ベルカ式使いの騎士レイン・ハラウンは母親のリンディ・ハラウンから協力を頼まれる。

闇と蒼銀：時を越えて再びあいまみえる。
初投稿ですので誤字脱字が多いかもしれませんがよろしく願います、また少し無理矢理な所があるかもしれませんがお願いします。

主人公＋デバイス設定（前書き）

レインとエリアの魔導師ランクを載せるのを忘れていたので載せました。

主人公+デバイス設定

レイン・ハラオウン 13歳

身長 165cm

体重 48kg

性別 男

所属 航空武装隊

階級 一等空尉

魔導師ランク S+

魔法術式 古代ベルカ式

デバイス 魔導書型ストレージデバイス「蒼銀の書」、ユニゾンデバイス「エリアルフォース（通称エリア）」、アームドデバイス「シルバーブリザード」

趣味 読書 料理

好きな物 母、エイミィ（ただし少し困っている） 兄

嫌いな物 人を泣かせる事 人を馬鹿にする人

悩み 女装の強要をされる事

性格 優しさの塊、悩んでいる人を放つとけない 他人優先

見た目 クロノをもう少し女の子っぽくした顔に腰まで伸びた蒼い髪（切りたくても切れない）に男性用の制服を着ている。

備考 クロノの弟で時空管理局の航空武装隊所属の騎士。見た目のことも相まって、男女問わずに人気で一部ではファンクラブが出来

ているほど。ランクはクロノより上だが模擬戦の成績は五分五分である。

イメージCV 佐藤利奈
エリアルフォース

所属 航空武装隊

階級 三等空尉

身長 30cm (アウトフレーム状態152cm)

体重 秘密です

魔導師ランク AA+

見た目 リインフォース?の髪を短くし髪を蒼くした感じ

好きな物 マスター、甘い物、猫、リンデイ、エイミィ(レインを女装させる者同士)

嫌いな物 苦い食べ物、お留守番、マスターを侮辱する人

趣味 マスターに女物の服を着せること

性格 天真爛漫、前向き、陽気、悩みなんて持たない

備考 蒼銀の書の管制人格でありレインのユニゾンデバイスでもある。普段はアウトフレームでレインの仕事のお手伝いをしている。

レインとユニゾンすると黒い瞳が蒼に変わる。また、単体でも魔法の使用可能である。

イメージCV 伊藤かな恵

シルバーブリザード

AI 寡黙な男性

喋る言語 とりあえず地球の言語の5割は大丈夫だが主に日本語

備考 アームドデバイスでありながらインテリジェントデバイス並
のAIを持つデバイスなので戦闘に仕事全てにおいてのパートナー
もちろんカートリッジシステムもある。

あと私の力でデバイスは全て日本語表記です。

第一話 始まり(前書き)

ようやく本編スタートです。この小説は本家のアニメでいえば三話あたりからのスタートとなりますのでよろしくお願いします。また、感想等もどしどし待っております!!

カッコの使い分け

「」 会話文(デバイス含む)

『』 念話

〔〕 紙等に書かれた文字

（） 独り言等

となります。

第一話 始まり

時空管理局 第124航空武装隊舎

「ふう…今日の仕事終了…と…エリアとシルバーもお疲れ様。」

この男の娘（誤字に非ず）はレイン・ハラウン…時空管理局航空武装隊に所属の古代ベルカの魔法を使う騎士である。

「本当ですよ…全く部隊長もいくらマスターが優秀だからって仕事を回し過ぎですよ!..!」

そして、仕事の多さを嘆いたのはエリアルフォース…レインのユニゾンデバイスであり蒼銀の書という魔導書の管制人格でもある女の子である。

「あはは…そう言わないの…それだけエリアは僕と一緒にいれるだろ？（頭撫でる）」

「／／／／／／／それもそうですね…（とろけた表情）」

エリアはマスターであるレインのことが大好きで、たまに頭を撫でらている時が一番幸せらしい。

「あはは…相変わらずだね、エリアは…それにしても母さんやクロ兄にエイミィさん…皆元気かな？」

レインが言った母さんと言うのは時空管理局提督で艦船アースラ船長のリンディ・ハラウン…その人である。そのアースラの乗組員

で通信主任のエイミー・リミエツタとは知り合いでそのまたアースラ所属で本局執務官クロノ・ハラオウンはレインの兄となるのだがレインの見た目とクロノの背のせいか…レインが上に見られる…しかもお兄さんではなくお姉さんとしてである。

「確かに母さんとエイミーは軽く壊れてると思いますね。今度会った時は覚悟した方が良いでしょう。」

「そうだね…何着着る羽目になるのかな…」

そう、リンディとエイミーは良くレインに女物の服を着せて楽しんでるのだ…エリアもなのだが…レインは別に嫌ではないがたまに困りの種ではある。

《マスター通信です…相手はリンディ殿ですよ》

「あはは…噂をすれば…だね…」

「ですね…出ましようよ…マスター」

「はいはい…もしもし、母さん？」

と言いながら画面を開いた…

「はい…久しぶりね レイン 私が地球に調査に行った時以来かしら？」

「ハハハ…そうだね…母さんも相変わらず元気で何よりだよ。それで要件は？…母さんが意味も無く僕にデバイス通じて連絡なんてし

ないからね……」

「あら……鋭いわね……流石はクロノの弟ね……単刀直入に言うと私達に協力してほしいのよ。」

「何？クロ兄や噂のAAAランクの二人の魔導師が居るのに辛い内容なの？」

「そうなのよ……なのはさんにフェイトさんもやられちゃったの……それに……」

「それに？どうしたの？」

「なのはさんは蒐集されたの……ここまで言えば分かるわよね……」

「……………………了解……すぐに向かうよ……それに母さんのことだしもう部隊長にも伝えてるんでしょ？」

「まあね……詳しくは本局で伝えるから来て頂戴ね……こっちに来る時に着る服はこっちで用意したから」

そして、通信が切れる……

「ふう……聞いてたよね……エリア……どうやら次の仕事は長くなりそうだよ……」

「闇の書……ううん……夜天の魔導書ですね……今度こそ苦しみから解

放させてあげないと…」

「そうだね……………さて、エリア、準備しようか？多分今までで一番の荷物が要りそうだからね。」

「はい マスター ……でもリンディさん…何か気になること言っただ気が…」

コンコン…コンコン…

「はい…どちら様ですか？」

「すみません…宅配便です。…レイン・ハラオウンさんでしょうか？」

「はい…そうですが…」

「リンディ・ハラオウンさんよりお荷物です。」

「……………母さんから？なんだろう？…態々すみません…サインで良いですか？」

「あつ結構です……………はいありがとうございます。…それでは…自分はこれで失礼します。」

「マスター どうしたんですか？」

「ん？母さんから荷物が届いたんだ…なんだろう…(固)」

「どうかしたんですか…ワアアアア」

そこに有ったのは時空管理局の女性用制服に「これ着て来て」と書いてあるメッセージカードがあった…

「母さん…これ10回目だよ…まあ良いか…エリア…それじゃ準備して本局に向かっちゃおうか？」

その後着替えと準備を終えて本局に向かった二人…その道中…航空武装隊の新人から告白紛いなことを受けたのは言うまでもない…

時空管理局本局廊下

「増援？それって本当なの？クロノ」

「ああ…決定事項だ…もうそろそろ着く筈だ…（まあ…半分は母さんとエイミーが我慢の限界を越えたからなんだが…はあ今度はどんな格好で来るんだか…）」

「へえ〜楽しみだね、「フェイト」ちゃん」

「うん…そうだね…「なのは」…」

今名前を呼び合いクロノと話して居たのは高町なのはとフェイト・テストロツサ…二人は元はジュエルシード事件と言う事件で敵同士だったのだが…なのはの懸命な説得が功をそうして…分かり合い…友達となった…

「フェイト〜」

「なのは！〜！」

「アルフ」

「ユーノ君」

この二人？はユーノとアルフ…ユーノはなのはが魔法を知るきつかけとなった人物でアルフは狼を素体としたフェイトの使い魔である…

「あつ…アルフは聞いた？増援の話？」

「ユーノ君も聞いた？」

「ああ…アタシとユーノはエイミイから聞いたよ…でもそん時のエイミイ…なんだかすんごい興奮してたんだけど…クロノ…何か知らないかい？」

「ああ…会えば分かるさ…（はぁ…）」

『ねえ…フェイトちゃん…なんだかクロノ君、疲れてない？』

『うん…どうしたんだろううね…』

そして…その増援を除く全員がとある部屋に集まった…

「はい…皆さんに集まってもらったのは闇の書の調査の本部などについてです…それと前回のこともありますので新たに一名メンバーが増えます…が…まだ来ていないみたいなので…先に…」

ウィーン…

「……………と言う訳なんだ…理解してくれたか…」

「はい…なんとか…」

「全く…母さんとエイミイもいきなり女装なんてさせて…たく…
ブツブツ…」

とクロノが愚痴を言っていた…そこに…

「レ〜〜〜〜イン！！！」

レインにこの制服を送った張本人のリンディとエイミイが本当に飛んで来た…

「母さん！？エイミイさん！？」

そのままレインはリンディとエイミイのタックルをもろに受けた…

「痛たたた…久しぶりですね…母さん…エイミイさん…」

「うん…やっぱり似合ってるわ…やっぱり女性として入局させた方が良かったかしらね？」

「ですよね〜〜…にしても綺麗だな〜…嬉しい限りですよ。」

等とレインの服やその他の感想を述べていた二人であったのだが…

「母さん！！エイミイ！！…あんまりレインのことを知らない人がいるところや管理局内で女装させるな！！…いちいち説明する僕の身にもなってくれ！！！」

クロノがキレた…そして二人に説教を始めて20分後…

「ク…クロノ君…そこまでにしてあげたら…ね？」

「そ…そうだよ…一応ここ廊下なんだし…他の人に迷惑だからね？
…それに早くマンションに行かないと…引越しの人にも迷惑だし
…」

「…そうだな…すまない…暴走をしすぎた…みたいだ…レイン
…話は聞いてるよな…」

「……………うん…母さんから概要は聞いたよ…闇の書…いや…
夜天の書が関係しているんだよね…」

「ああ…そうだ…レインが所持している、蒼銀の書と双壁をなした
魔導書…それが関係している…どうやらあれを完成させようとして
いるらしい…」

「そんな！？あれを今、完成させちゃうと主のリンカーコアを浸食
し尽くしちゃうだけだよ！！」

レインの胸ポケットからエリアが顔を出して言った…

「レイン君…その子誰？」

「ん？ああこの子？この子は僕のユニゾンデバイスだよ…ほら、エ
リア…挨拶」

「はい…初めまして、エアリアルフォースです！！…長いからエリア
って呼んで下さい。」

「よろしくね エリア（ちゃん）」

流石は女の子…すぐに仲良くなった3人であった。

「あつ…そういえばクロノ、蒼銀の書って何？」

「ああ…今すぐにも説明をしたいのだが…これも長くなるから、
そうだな…今の問題が解決したら説明するよ。」

「ごめんね…時間が出来たらちゃんと話すから…エリアのことも蒼
銀の書のことでも…でもまずは…」

「ああ…力を求めた過去の主のせいでも悪しき力を得てしまった…不
幸な魔導書を元に戻す…だろ？レイン。」

「うん…待っててね…必ず君を…いや、君たちを苦しみの連鎖から
救い出すから…夜天の魔導書…」

今、物語の幕が上がる…

第一話 始まり（後書き）

初めまして、この小説の作者の蒼空人そらこと申します、今回初投稿させて頂きました。この作品は本家のA・Sに少しオリジナル設定を追加しています。この話を読んで分かった方もいるとは思いますがこの作品のクロノ君は闇の書を悪くは思っていないません。理由はレインが蒼銀の書の主となる時にリンディさんとクロノ君を交えて闇の書の話聞いたからです。

後は数人が若干キャラが崩壊します（笑）。後、ヒロインのことですが決めてはいます（大体予想はつくと思いますが）。

まだまだ未熟なところはありますがこの作品をよろしく願います。

第二話 引越しと夜天の主との出会い（前書き）

さて、第二話です。：内容はタイトル通りですが、よろしくお願
いします。

引き続き感想等は受け付けてますのでよろしくお願
いしますm（）

第二話 引っ越しと夜天の主との出会い

第97管理外世界地球 海鳴市

「うわあゝ…本当に私の家の近くだ」

「そうなの？なのはの家どこ？」

「ほら、あそこだよ」

ここはなのはの実家近くのマンション…リンデイがなのはの警護を兼ねてこのような場所に本部を置くことになった。

「フフフ…母さんも優しいな…態々こんなところを本部にするなんて…ね クロ兄。」

「ああ…そうだな…レイン、自分の部屋に荷物はもう入れたのか？」

「勿論、そう言うクロ兄はどうなの？」

「こつちも終わっているぞ…」

等と話していると

ピンポン…

「来たみたいだね…なのはちゃんとフェイトちゃん呼ぼうか？クロ兄どうする？なのはちゃんのお友達と対面する？」

「ああ…ちょっとだけ顔は出すがそれ位だな…その時に頼みがあるんだが…」

「分かってる…ちゃんとお兄ちゃんって紹介するんでしょ？ちゃんとやるよ。」

「そつか…なら良いんだが…なのは…フェイト…友達が来ているよ…」

「「はい!!」」

「フフフ…元気だね、あの2人は…」

「元気過ぎて困るところもあるがな…さて、僕達も行くか…」

玄関

「こんにちはー」

「来たよー」

この2人はアリサ・バニングスと月村すずか、高町なのはの親友である。

「えっと…」

「初めまして…は変かな？」

「いつもビデオメール見てたからね…」

「へえ…フェイトちゃん…ビデオメール送ってたんだ。」

「ああ…僕と母さんもなのはから来たのを見たりはしたさ。だが出たりはしなかったさ…友達同士の時間を邪魔するなんて野暮な事したくはないからね。」

「フフフ…そうだね…初めまして…アリサちゃん、すずかちゃん」

「フェイト…誰なの？この女の人？隣にいる男の子のお姉さん？」

「フフフ…僕はレイン・ハラウンだよ。で、こちらはクロノ・ハラウン…僕のお兄さん…ちなみに僕の性別も男だからよろしくね」

「…ええええ！？」

案の定驚かれた。

それから10分後…

「いや…びっくりしたわね…今までいろんな男を見て来たけど…ここまで女性に近い人は初めてだわ…」

「本当だよね…しかも凄く顔のパーツが整って綺麗ですし…」

「あはは…そう言ってもらえると嬉しいな」

「でも、その見た目だと困ったこととかないですか？」

「まあ…これと言っていないかな？」

「へえ…そうですか…っていつまでこんなところで立ち話してるのかしらね？」

「そうだね…どこかで座りながら話の続きしようか？」

「じゃあうちのお店はどうかな？」

「なのはちゃんのお店か…良いね 僕も行つて良いかな？」

「良いですよ むしろ大歓迎!!!…クロノ君は？」

「いや…僕は終わってない荷物整理をやってるよ…」

「私は行くのかしら…なのはさんのお母さんにご近所挨拶をしないとね。」

「あつ…母さん…大丈夫なの？」

「大丈夫よ…それに子供だけだと危険でしょ？」

「そう言うことなら…よろしくお願いします。」

こうして、なのは達は翠屋に向かうのであった…

そして歩いて5分後、

カランコロンカラン…

「お母さん…ただいま」

「おかえり、なのは…アリサちゃんとすずかちゃんもいらっしやい…あら？こちらは？」

この人は高町桃子…なのはのお母さんなのだが…見た目は20代前半である。

「初めまして…この近くに越して来たリンディです。」

「あらあら…」丁寧にも…で？そちら2人はご姉妹で？」

「いえ…この子は知人から預かっている子でして…で…レインご挨拶。」

「初めまして…レイン・ハラオウンです。見た目はあれですが…一応男で上に一人兄がいます。」

「あら！？可愛い息子ですね…てつきり娘かと思いましたが。」

「でも、女性の服も似合うんですよ」

「確かに似合いそうですね…レイン君、ちょっと来てくれる？」

「あっ…はい…と言う訳だから…後はなのはちゃん達でゆっくりしてて。」

「はい…（）にははは…お母さんに捕まっちゃった…）…皆、外の

席に行こうか？」

なのはは心の中でレインを心配していた。

「う…うん…（どんな格好するのか気になるな）」

フェイトはレインの女装が気に入った様子。

「レイン君の着替えが終わったらレイン君に飲み物持って行かせるから待っててね…じゃアリンディさん…こちらに…」

「はいはい」

どうやら…2人の間には既に女装協定が結ばれていた様子だ…

そして…

「キュ…キュー…！」

「ああ…ユーノ君久しぶり」

「ん…？なんか…あんたのこと…どこかで見た気がするのよね？」

「…！！…！！…クウン…！」

等とユーノがすずかに遊ばれ、アルフは内心ドキドキの状態でした…そこに…

「皆…桃子さんから紅茶とケーキだよ。」

と聞こえたので振り向くと…

「……………」

「……………鼻血が…」

全員が顔を真っ赤にした…フェイトに至っては鼻血が出るのを我慢した…何故なら振り向いた目線の先には黒と白のメイド服に身を包み、服と同じ色のカチューシャをしてお盆を持って微笑んでいるレインがいたからだ…

「?…皆どうしたの?顔真っ赤だよ?」

と首を傾げて言った…

「ブハッ!」

その仕草が可愛い過ぎたのかフェイトが鼻血を出して倒れた…

「わわわ…フェ…フェイトちゃん…大丈夫!」

当然、レインは大慌て…その仕草も可愛いかったのでそれを見たなのは達は…

「凄まじい破壊力…」

と卒倒するのを耐えながら思い…ユーノはと言つと…心の中で…

「僕は…なのはの次に男の子に…惚れてしまった…」

と呟いていた…

そして、フェイトが復活してから10分後…

「大丈夫？フェイトちゃん…皆…」

流石にメイド服のままだと不味いので翠屋の女性制服を着て会話に参加したレイン…また、その途中フェイトの小学校の制服が届き…なのはのクラスメイトになる話を聞いたのだ…ちなみにレインは事件終了までアルバイトとして翠屋で働くこととなった…リンディも二つ返事で承諾した…ちなみにメイド服を着ていたレインはいつの間にか写真が撮られていてエイミィとエリアに渡られたの言うまでもない。

「はい…大丈夫です…（あう…どうしよう、まだあれが目に焼き付いてて…恥ずかしい…）」

とは思っていてもフェイトはついさつき桃子が立ち上げたRJS（レインに女装をさせよう）会の会員になったの言うまでもない。無論リンディにエイミィ…さらにはエリアも会員になったのも言うまでもない

「レイン君…ちょっと買い出し行って来てくれる？」

「あつ…はい…それじゃ僕はこの辺で仕事だから…皆でゆっくりしてて（ニコッ）」

「「「「はうう…可愛い…」」」」

さらに会員が三人増えたことをここに記す…

買い出しに出たレイン視点…

「えつと…小麦粉に卵…それに牛乳…これが店用で…牛肉に玉ねぎ…人参…これが高町家用…つと…うーん…頼まれたは良いけど…僕…ここの地理分らないんだよな…シルバーにも登録して無いしなあ…ん？あれ？あの子どうしたんだろう？行ってみよ…」

視点をちよつと変更…

「あかん…どないしょ…車輪が溝にはまってしもうた…うんしょ…うんしょ…あかん…びくともせえへん…」

えつと…挨拶した方がエエかな？初めまして…八神はやてって言います…年は普通なら小学三年生をやってる年齢なんやけど…ちよつと複雑な理由で休学中です…今までは一人で暮らしつとたんやけど…私の誕生日の日に、突然家族が三人増えてペットも飼い始めました…ちよつと話は反れたけど今、絶賛困ってます…私は生まれつき足が不自由で車椅子生活なんです…車輪が溝にはまってしまいましたが…なので動けなくて困ってます…誰か助けてくれると嬉しいんやけど…なんて思ってる…」

「どうしたの？」

綺麗な人に声をかけられました…

レイン視点

僕は遠くから見た子のところに行くと、車椅子の車輪が溝にはまって動けなかったみたいだ…たまらず僕は声をかけた…

「どづしたの？」

「ただど、返事がない…」

「……………あつ、すみません…突然声をかけられたもんで…」

「あつごめんね…びっくりしちゃったんだね…じゃあ改めて聞くけどどづしたの？」

「見ての通り…車輪が溝にはまってもうたんよ…すみませんが…外してくれませんか？」

「良いよ…よいしょ…っと…はい…これで大丈夫だと思うけど…」

「はい…ありがとうございます…ところでお名前は？…私は八神はやてって言います。」

「僕はレイン・ハラオウン…長いからレインで良いよ。はやてちゃん」

「あれ？もしかして…男の子？」

「うんそうだよ…でも髪長くて顔がこんな感じだからよく女の人間と間違われるけどね。…そうだ、はやてちゃん。」

「どづしたの？レイン君？」

「近くにスーパー無いかな？僕アルバイトしてるんだけど…」
「道初めてで道分らないんだ…」

「あはは、そやったんや うちも買い物行く途中やったんよ…よかつたら一緒に行かへんか？道案内もするで？」

「じゃあ…お言葉に甘えて…車椅子押そうか？」

「電動やから…平気だよ」

そうしてはやてとレインはスーパーに向かって歩いて行った…

そして、スーパーに行って買い物を終えて10分後…

「ごめんな…態々荷物持ってくれて…」

「フフフ…気にしなくても平気だよ？僕ははやてちゃんと会ってなかつたらあそこら辺をさまよい続けていたからさ」

「フフフ…ほんまに女の子みたいやね…男って言わなかつたら男とは思えへんな。」

「まあ…そういう生まれ方をしちゃった訳だしね…別に僕はこの見た目は嫌いじゃ無いしね、ただ髪は切りたいかな？長いから洗いにくくて…」

「確かにな〜切らへんの？」

「母さんが切らせてくれないからね…でも慣れって凄いね、今じゃ全然平気だよ。」

「アハハ…確かにな…あつ、大丈夫なん？バイト中なんやる？」

「大丈夫…女装一回で手打ち済みだから。」

「へえ…どこでバイトしとん？」

「ん？翠屋って言う喫茶店だよ？」

「うちも行ってええかな？」

「はやてちゃんなら喜んで…でも補導されないですよ？」

「大丈夫や うちにはちゃんと家族おるし…後、学校は休学中やから…」

「あつごめんね…傷付いちゃったかな？」

「フフフ…平気だよ…ただちょっと困らせたかったんよ」

「あつひどいな…はやてちゃん。」

「ごめんごめん。」

と話していると…

「はやてちゃん…！」

「あつ！！…迎えが来たみたいや…もう大丈夫や…ありがとうな…
…レイン君。」

「そうみたいだね、それじゃ道案内ありがとうね。」

「バイバイな。」

はやてとレインはそれぞれの帰路についた…

はやて視点

「態々ごめんな〜シャマル…迎えに来てもらうって…」

「大丈夫ですよ…はやてちゃん…ところで一緒にいたあの女の子は誰だったの？」

「フッフ…シャマル、あの人は男の子でレイン君言うんよ？」

「えええええ！？そうなんですか！？…どう見ても女の子でしたよ！？」

「人は見た目やあらへんで？とか言ってる私も最初は女の子と思っ
とったけどな。…ところでシグナム達はまだお出かけ中か？」

「ええ…でも皆夕御飯には帰るって言ってましたよ？」

「そっか…なら腕奮って料理せなあかな。」

「楽しみですね。」

なんて会話を交わしながら帰って行くはやてであった…

レイン視点

「桃子さん、ただいま戻りました…」

「レイン君、お疲れ様 ごめんね…いきなり難題突き付けちゃって…」

「いえいえ…あらかじめ調べなかった僕も悪かったですし…それで何を着れば良いですか？」

「あら!?!…本当に良いの?…そうね…あつ…あれなんて良いかも」

ちなみにお店自体は閉店していて、いるのはリンディにエイミィにエリアにクロノ、そして四人娘とユーノにアルフである。(クロノは無理矢理連れてこられた…)

「はあ…なんで…自分の弟の女装を見ないといけないんだ…」

「良いじゃん、クロノ君!?!…一度見たらハマるよ!?!レイン君の女装!?!」

とエイミィが親指を立てながら言った…

「あのなあ…僕はハマってないから呆れてるんだぞ?」

クロノが溜め息混じりに言った…

「ぶう…クロノはあれの素晴らしさが分からないなんつかしいです…!」

「うんうん!」

クロノと喋れない2人以外全員が声を揃えて言った…

「勝手に言っけてくれ…」

「皆…レイン君のお着替えが終わったわよ…レイン君出てきて…!」

「はい。」

呼ばれると同時に出てきたレイン…その身を聖祥大附属中のセーラー服で長い髪をリボンでポニーテールにして目にだて眼鏡をかけた手には鞆を持った状態で…

「バタツ…」 倒れた音

「可愛い…可愛すぎる…」 顔真っ赤

「はあ…」 呆れてる

リンディ達はその可愛さに倒れ…なのは達は素直に感想を述べて、クロノだけがその様子を見て呆れたのか溜め息をついた…

こんな感じで地球生活初日を終えた…

第二話 引っ越しと夜天の主との出会い（後書き）

さて…未来の魔O…ゲフンゲフン…もといなのはのお母さん桃子さんとはやてちゃん登場しました。…そして、なのは達のキャラの崩壊が…特にフェイトやリンディさんやエイミイがヤバい…以上のフアンの皆さんごめんなさいm() () mですがこれからも今作を読んでもくれると嬉しいです!!

これからもよろしく願います(^ - ^) /

第三話 レインの日常と思わぬ鉢合わせ(前書き)

はい…やっと更新しました(汗)…すいませんm(――)m
なかなか案が浮かばずにこんな遅くなってしまいました。内容は
酷いと思いますがよろしくお願いします。

第三話 レインの日常と思わぬ鉢合わせ

ハラオウン家 レインの部屋

「うーん…ふにゃあ…良く寝たつと…シルバー…今、何時か分かる？」

「朝の6時30分です…主にしては珍しい位長く眠っていましたね。」

「うん…まあね、さてと…シルバー、屋上行っていつものやるうか？」

「了解しました…」

マンション屋上

「ふう…それじゃシルバー、お願い」

「了解…モード1セット」

その声と共にレインの手には刀身が白銀、持ち手と鞘が水色の洋式の剣が現れた…ちなみに服は動きやすい普段着である。

「主…レベルはどの程度が良いでしょうか？」

「そうだね…A+位かな？」

「了解しました…では結界と仮想敵のホログラムを展開します。」

今から行うのはいわば模擬戦、ベルカ式は実戦を重ねることで強くなる術式の為…ホログラムで作り出した敵と戦闘をする訓練をレインは朝欠かさず行っている…

そして、一時間後…

「ふう…今日はここまでかな？シルバー…結界の解除を頼むね。」

「了解…」

結界が解ける…

「さて…もうクロ兄達も起きてくる時間かな？早く戻らないと…今日は和食にでも挑戦しようかな？」

何の話かという朝食のことである…レインは料理を作るのが好きなのでハラオウン家では料理の担当はレインなのだ…腕もなかなかである。

ハラオウン家 キッチン

トントントントン…

「ふんふんふん…」

「ふあ…久しぶりに寝たな…」

「あ…クロ兄、おはよう…」

「相変わらず朝は早いんだな…レイン」

「そんなことないよ…今日はいつもより遅い目覚めだったよ?ところで母さんとエイミイさんとフエイトちゃんはまだ寝てた?」

「まあな…でもそろそろ来るだろう?…ところでエリアはどうした?」

「まだ寝てる…これ作り終えたら起こしに行くよ。」

「そうか…ところで何を作ってるんだ?あまり嗅いだことのない匂いだが…」

「ああ…桃子さんから教わった和食だよ…初めて作ったんだけど…味見してくれない?」

そう言っつて卵焼きを一つ皿にのせてクロノに渡した

「どれ…うん…相変わらず料理の腕は凄いな…」

「良かった…じゃあエリア起こしに行くからクロ兄は待っててね。」

「了解した。」

レインの部屋

「エリア…朝だよ、そろそろ起きなよ。」

「後二時間…待って下さい…マスター…すう…」

「……………そんなリアルな数字で返さなくても…ふう…仕方ないな…」

とエリアの耳元である言葉を言った…その瞬間

「マスターアアアアア…お留守番は嫌です…!!」

「フフフ…大丈夫だよ、おはよう、エリア（ニコツ）」

「あっ…おはようございます、マスター…（泣）」

「でも、今度は自力で起きようね？」

「はい…気をつけます…」

「ほら、もう朝御飯は作ってあるからさ…行こう？」

「はい…今日は何ですか？」

「フフフ…行けば分かるよ」

ハラオウン家 リビング

「おはよう レイン。」

「おはよう〜」

「えっと…おはようございます…」

「おっはよう〜」

上からリンディ、エイミィ、フェイト、アルフである。

「おはよう…フフフ、フェイトちゃん、その制服似合ってるよ。」

「えっと…その…ありがとうございます…」

「さて、食べちゃおうか？…フェイトちゃんは学校で僕は翠屋に行かないと行けないから。」

「そうね…それじゃあ…」

「いただきます。」

全員が声を揃えて言った…しばらく食事をしていて…

「…これ美味しい…誰が作ったの？」

「ウフフ…フェイトちゃん…これ全部レイン君が作ったんだよ？」

「そうなの!？」

「うん、一応ね…全部桃子さんから教わった料理なんだけどね…」

「凄いね〜…エイミィより数段旨いよ。」

「アルフ…酷いな〜これでもレイン君にも美味しいって言わせたんだよ!〜!」

「でも、レインには敵わないんだろ？エイミー。」

「うう…それはそうだけど…」

等と会話をしながら20分後…

「じちそうさま〜」

「フェイトちゃん…そろそろ行くっか？」

「うん…あっ、お弁当…」

「フフフ…はいこれ…急ピッチで作ったからあまり味の保証は出来ないけどね」

「ありがとうございます…」

「それじゃ母さん、行ってくるよ…何かあったら連絡ちょうだい。」

「はいはい」

フェイトは学校に向かうスクールバスが止まるバス停にレインはその付き添いがてら翠屋に向かった。

バス停

「なのは〜」

「あつ フェイトちゃん、レイン君」

「フフフ…おはよう、なのはちゃん、アリサちゃん、すずかちゃん。」

「「おはようございます。」」

「レイン君…これから家でお仕事ですか？」

「まあそうだね、フェイトちゃん連れて来たのはそのついでみたいな感じだしね…あつバスが来たみたいだよ？」

「あつ本当だ…それじゃまた、翠屋で」

「行つてきます…レイン…」

「それじゃあね〜（満面の笑み）」

ちなみになのは達は学校でレインのことを聞かれ大慌てをした…レインがなのは達の通う学校で有名になったのは言つまでもない…

翠屋

「桃子さん、おはようございます。」

「あら、わざわざ悪いわね…こんな朝から来てもらつちやて。」

「いえ、勝手に早退してしまつんです…少しでも長く協力するにはこれ位としないと示しがないので…」

レインはアルバイトの条件としてリンディから連絡があつた場合早退を認めると言つのを桃子と士郎に頼んだ…士郎は少し難色を見せたが桃子の底冷える笑みで承諾した…というかさせた…

「やあレイン君…おはよう。」

「あつ士郎さん、おはようございます。」

「それじゃあ、早速だが…仕込みを手伝ってくれないかな？」

「あつはい 了解しました…着替えて来るのでそれが終わつたらで…」

翠屋のエプロンと制服に着替えに向かつたレイン…まあ例によつて女性物であるが…

翠屋 厨房

「いや〜…それにしても上手だね…とても13とは思えない腕だ…恭也と美由希に見習わせたいな…」

「いえいえ…僕なんてまだまだですよ…士郎さんには敵わないですから。」

「君は謙虚だね…まあそれが良いところなのかもな…それにしても服は女性物で本当に大丈夫なのかい？」

「はい…まあ生まれ方がこんな感じですから気にしていませんよ。」

「なるほどね…ところで君は剣をやってるね？」

「あはは…分かりますか…」

「まあ…うちも剣道をやっているからね…どことなく分かるよ…どのくらい強いかもね…」

「そうですか…どうなんです？ 士郎さんから見て僕の腕は？」

「いや…なかなか腕だよ…うちの恭也と同等だろうね…」

「嬉しい限りですよ…時間があればぜひ手合わせしたですね…」

「そうだね…時間が出来ればぜひ頼むよ。」

「はい…その時はぜひ…」

なんて約束を交わした二人であった…

「レイン君…切りが良いところでこっちを手伝ってちょうだい。」

「すみません…桃子さんに呼ばれたのでそっちに向かいます。」

「ああ…頑張つてね」

桃子に呼ばれてレインは厨房を離れた…

「あの子は何かとても大きな何かを背負っているな…とても13の子が背負えないとてつもない何かを…」

士郎はレインの背から大きな使命を感じ取っていた…

「一方レインはと言うと…」

「どうしたんですか？桃子さん？」

「レイン君実はね頼みがあるのよ…」

「？何ですか？僕なんかが出来ることで良ければやりますけど…」

「えっとね…ほら前にメイド服着てもらったでしょ？」

「ああ…はい…着ましたね…あれがどうかしたんですか？」

「実はね…あれがお客さんに大好評であれやいろんな衣装を着て欲しいって注文が殺到したのよ。だからどうかなく…と思ってね。」

「あはは…まあ良いですけど…ここって喫茶店ですよ？別にコスプレカフェでは無いんですよ？」

「うん…でもどうかなくと…ちなみにリンディさんは速攻OKだったけど…レイン君は？」

「まあ…大丈夫ですよ…で…今日は何を着れば良いですか？」

「えっとね…これ」

桃子が出したのは前に着たメイド服一式だった…何故か伊達メガネもあつた

「これですか…こんな男が着て大丈夫ですか？」

「大丈夫よ、レイン君なら（親指立てて）…むしろ、お客さんがそれを推薦したのよ。」

「あはは…分かりました、僕はこれを着て接客すれば良いんですね…一人称僕で良いんですか？」

「問題ないわ…それじゃあよろしく頼むわ、レイン君。」

「はい、分かりました。」

八神家

「なあ、皆今日は暇か？」

「はい…今日は道場は休みの日ですから。」

「爺ちゃん達の集まりもねえし病院の日でもないしな…どうしたの
はやて…そんなこと聞いたりして」

「いやな…ちよつと行きたい所があるんよ。」

「どこどこ！？はやてが行きたい所ならあたしも行きたい！！」

「実はな…翠屋って言う喫茶店なんよ。」

「ああ…この前はやてちゃんが話してた子がアルバイトしてる所

ね…私も行きたいです…シグナムはどうする？」

「ご一緒して大丈夫ですか？主はやて。」

「勿論や！ザフィーラはどないする？」

「お誘い嬉しいのですが…この姿だと迷惑だと思つので私は留守を預かりと思います…」

「平気やよ…介助犬つてことにすれば飲食店でも入れるで？たまには一緒に出掛けようや…な？」

「主がそこまで言うのでしたらお言葉に甘えて…」

「ところではやて…そのアルバイトの人つてはやての友達なの？」

「ん〜？友達つて言うより助けてくれた恩人…って感じかな？」

「何！？はやて誰かに襲われたりしたの！？」

「違うよ…前に一人で買い物してたら車輪が溝にはまってしもつてな…それでその人が取ってくれたんよ。」

「あつそんなら良かったけど…」

「心配かけてごめんなあ〜…ほんなら出発や」

「うん」

昼12時 翠屋

レイン視点

「桃子さん、ケーキセット2つお願いします。」

「はい じゃあこれを5番のテーブル席に運んでね」

「はい、分かりました」

「レイン君、それ終わったらこっち来て、注文があるから…」

「はい 少しお待ちを…」

レインが来てから常連客は勿論、レインを見に来た客も多くいて席がほぼ満席になっていた。

「凄いですね…レイン君…まだアルバイト2日目なのに…一人であそこまでさばってる…」

「私達も負けてられないわね…」

「そういえばあのテーブル席予約入ってたけど…誰かしら等とスタッフが話していたらしい…」

カランコロンカラン…

「はい…あっ、はやてちゃんいらっしやい」

はやて視点

「えっと…ここやな、綺麗なお店やな…」

「確かに外観は綺麗にしていますね…」

「けどさ…はやて…見た感じ、凄え混んでるみたいなんだけど…大丈夫かな？」

「まあ平気やろ…入ってみようか？」

カランコロンカラン…

「あっ…はやてちゃんいらっしやい」

「……………」

「可愛い」

レイン君が出迎えてくれたけどシグナムとヴィータが驚いていて…
シャマルは素直に感想を述べてた。

「はやて…もしかしてこいつか？」

「うん、そやよ…久しぶりやね…レイン君」

「うん 久しぶり、はやてちゃん えっと…この人達のはやてちゃん
の家族？」

「まあ…そやね、紹介したいところやけど…その前にヴィータは謝った方がええで…」

「なんでだよ…ヒッ…」

ヴィータが店の中を見たら…お客さんと店員の女性から凄まじい眼光を感じとった…まるで…何レイン君を馬鹿にしていたゴラ…と言ってるように

「…ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい…以下略」

「彼女がここまで言ってますし僕も気にしてませんから…許してあげて下さい。」

「まあ…レイン君が言うなら、いいけど…言葉を選べよ…」

全員がそう言った…

「はい…気を付けます（ガクガクブルブル…）」

「アハハ…あっ…この子はヴィータ言っんよ…ほら、挨拶。」

「ヴィータです…えっと、よろしく…」

「よろしくね、ヴィータちゃん（ニコッ）」

「う…うん…よろしく（本当に男かよ…どっからどっ見ても女じゃんか…）」

「可愛いね？はやてちゃんの妹？」

「まあ…そんな感じじゃ…それでこっちがシグナムでこっちがシャマル言っんよ…」

「初めまして(ニコッ)」

「どうも…」

「こんにちは」

「ん？はやてちゃん狼飼ってるんだ…名前は？」

「ザフィーラ言っんよ…介助犬代わりなんやけど…駄目かな？…と言っか席空いとるか？」

「席は僕がキープしてるから平気だけど…桃子さん、介助狼って大丈夫ですか？」

「問題ないわよ、レイン君案内してくれる？」

「はい、じゃあはやてちゃん、ついてきて？」

「はい、ほんなら行こか…」

ちなみにシャマルはRJS会の会員となり、ザフィーラは何故かは知らないが嬉し涙を流していた…

「それでは注文が決まったら呼んでね」

「あっ待って…レイン君！」

「どうしたの？」

「いやな…ここ初めてやからよくわからんのよ…だからレイン君のおすすめ教えてえな。」

「そうだね…これなんかは好きだけどね？」

等と話していた…その間ヴィータは念話をしていた…

『なあシグナム…』

『どうした、ヴィータ…』

『この男女…この前の白い奴より多い魔力あつたぞ？』

『ああ…そうだな、主を救ってくれた人だが…蒐集させてもらうか…』

『駄目！！それだけは駄目！！』

『なんでだよ…シヤマル！！…そうしねえとはやて死んじまうんだぞ…！！』

『でも…でも…』

『シヤマル…辛いのは分かる…だが…主の為にも完成させるしか無いんだ…』

『そんなことないですよ…闇の書…いえ、夜天の書の守護騎士の皆さん…むしろ、今のまま完成させるとはやてちゃんの身を滅ぼすだけです。』

『なっ！？なんでてめえがあたし達の念話に割り込んでんだ！！』

『すみません、ダダ漏れでしたから勝手に割り込ませてもらいました。』

『やはり、魔導師か…テストロッサ達の仲間か？』

『正確に言えば、騎士ですが…フェイトちゃんの仲間なのは確かです…ですが勘違いしないで下さい…僕達はあなた方を捕まえに来た訳ではありません…あなた方を救う為に来ました…過去の主の身勝手な欲望で可笑しくなったあなた方を…』

『うるせえ！！…局の魔導師が知った口を聞くんじゃない！！』

『落ちて着けヴィータ…だが聞きたい…何故お前は我々が闇の書の守護騎士だと分かった…』

『蒼銀の書…と言えば分かりますか？』

『『『『！？！？！？！？』』』』

『ご存知でしたか…良かった…まだそこまで記憶データが壊れていなくて…では改めて名乗ります…僕は現蒼銀の書の主…レイン・ハラウンです。』

『そうか…だがどういうことだ？今のままでは主を殺してしまうとは？』

『この場では話せません…何せはやてちゃん…あなた達が蒐集をしていることを知らないみたいです…どうでしょう？この後、場所を変えてゆつくりと話しませんか？』

『……………良いだろう…』

『ちよっ、シグナム！？どういうことだよ！？』

『こいつの目だ…とても嘘をついているとは思えない…』

「？レイン君？皆？どないしたんの？」

「あっ…なんでもないよ…とりあえず、注文は？」

「ん？…レイン君のおすすめでええよ。皆もそれでええか？」

「はい、私達もそれで結構です。」

『それでは…僕は後少して仕事が終わるので、その時に…』

『了解した。』

こうして、夜天の騎士達との対談をすることとなった…

第三話 レインの日常と思わぬ鉢合わせ（後書き）

はい、ヴォルケンリッターとはやてとの話フラグです。O H A
N A S H I ではありません。（ここ重要です。）さて、オリジナル展開ですがこの作品ではヴォルケンリッター達となのは達は敵対しません。

フェイトとシグナム様を戦わせるのはシグナムが嫁でフェイトが妹な僕からすると心が辛いので（オイッ）。

じゃあ何と戦うんだコノヤローと思う人もいるとは思いますが、考えてはありますのでこれからもよろしくお願いしますm（――）m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8028n/>

魔法少女リリカルなのはA's 蒼銀の騎士

2010年10月25日17時24分発行